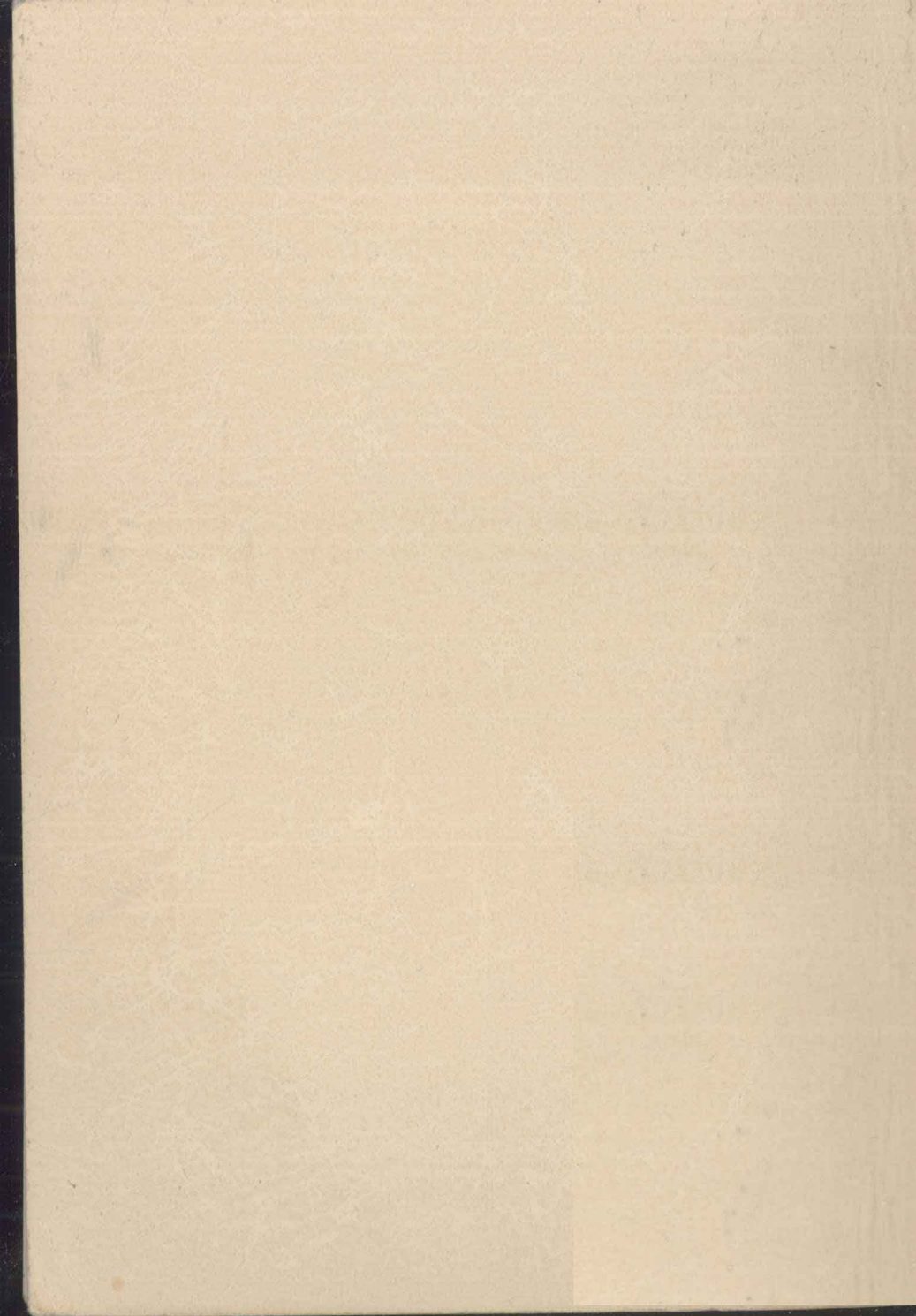
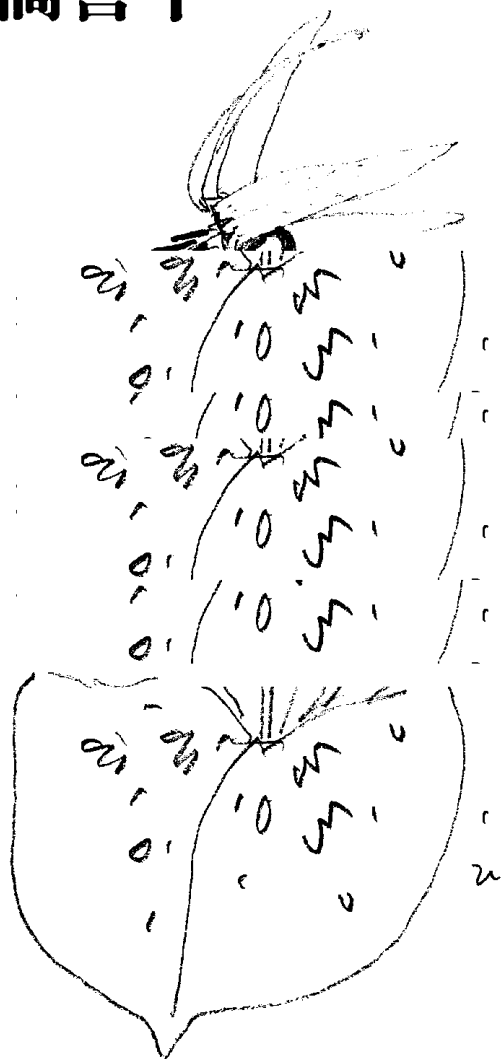




く

老妻看護記

高橋喜平



創樹社

●著者略歴

明治43年生れ。長年国立林業試験場にて雪崩の研究に従事し、昭和46年退職。以後文筆に親しみ現在に至る。

この間、日本エッセイストクラブ賞（第8回）、日本雪氷学会賞（第1回）、吉川英治文化賞（第11回）、アマチュア写真大賞（第1回）等受賞。

著書に、『雪国動物記』（日本出版センター）、『ツキノワグマ物語』（筑摩書房）、『日本の雪』（読売新聞社）、『遠野物語考』（創樹社）、『日本の雪崩』（講談社）、『雪と氷』（朝日新聞社）、『雪国博物誌』（クロスロード）その他多数。

現在、日本雪氷学会名誉会員。

現住所、岩手県和賀郡沢内村太田。

愛は限りなく—老妻看護記

0039—0250—4249

1987年7月20日 第1刷発行

1987年12月1日 第2刷発行

定 価 1200円

著 者 高橋喜平

発 行 所 株式会社 創樹社

電話・東京220・2771（代）振替東京3・138079

東京都杉並区上荻1—8—8 野村荻窪ビル6F 〒167

本文印刷 松沢印刷

装本印刷 広 陵

製 本 越後堂

1987© Kihei Takahashi 乱丁・落丁本はお取り替えます。

老妻看護記

愛は限りなく

目次



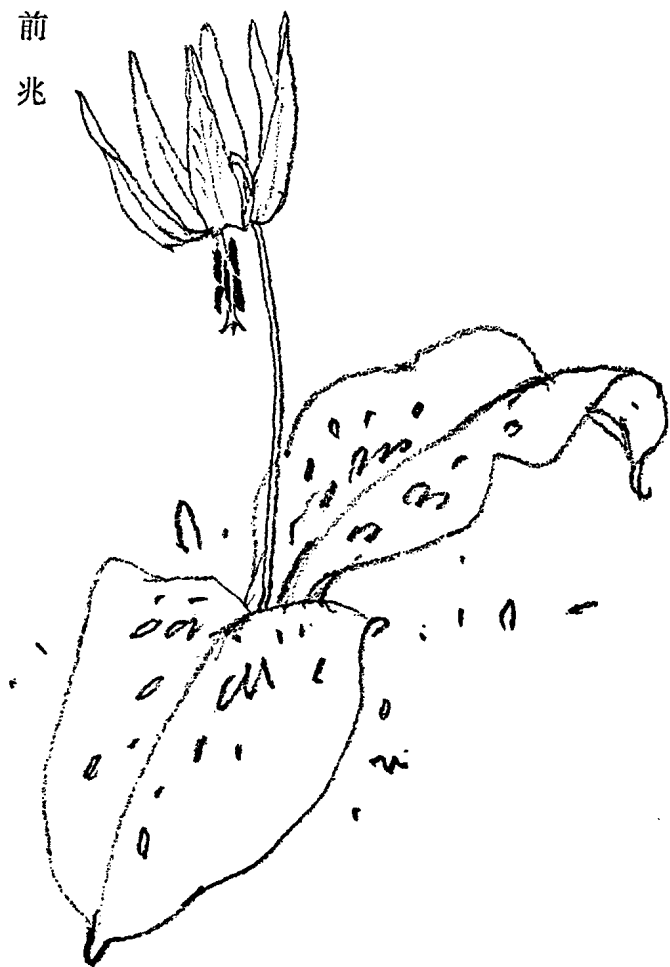
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
肋間神経痛	義歯を入れる	カタクリの花	食事と入浴	転院	入院雑感	ボケの症状	看病のこと	オムツのこと	シモの世話	腰椎圧迫骨折	前兆
103	95	85	77	67	57	49	41	33	23	15	5

あとがき

13	死の恐怖	111
14	食べものの話	119
15	入院患者	127
16	希望の日々	135
17	お盆の墓参り	147
18	退院	155
19	つかの間の倅せ	163
20	ギックラ腰	169
21	再度の入院	177
22	その後	183

装画||平山英三

1
前
兆



一九八三年一月二四日、午後一時半ころのことであつた。

いつものくせで、わたくしはコップ一杯の昼酒を飲んで、三〇分ほど昼寝をした。そのあと眼をさましたわたくしはトイレに行こうとして廊下に出た。

ところが、廊下のジュウタンの上に何かこげ茶いろのものが落ちていた。その形がどうもウンコに似ていたが、まさかウンコが落ちてゐるはずはないので

「おかしいなあ、なんだろう」

と思ひながら、しゃがんで一寸指でさわってみた。そして、その指の嗅いをかいでみた。その瞬間ウンコとする臭気が鼻をついた。正しくウンコである。驚いてまわりを見回すと、もう一ヶ所に落ちていた。

一体、誰がこんなことをしたのだろう。

このマンションの六〇七号にはわたくしども老夫婦が住んでゐるだけで、玄関には鍵がかかっており、窓も閉めてあるから、よそから人が侵入するはずがない。それ故、このウンコはわたくしか、家内のどちらかが粗相したものといふことになる。しかし、わたくしにはまったく記憶がないので、家内かもしれないと思つた。まさか、そういうことはないと思うが、そのほかには考えられないので、わたくしは家内を呼ぼうとした。しかし、ふと思ひあたる

ことがあって、呼ぶのを止めた。

「やっぱし、そうだったのか」

と、わたくしは愕然とした。この頃、いくらかボケたように思っていたが、まさかこれほどになっているとは予想もしていなかったからである。

わたくしはそのウンコを紙ですくい取り、そのあとをぬれた雑巾でよく拭いた。しかし、どうしてもシミは取れず、また、臭いも少し残った。

わたくしはこのことをどうやって家内に話したらよいものか、しばらく考えてみたが、結局、おだやかに聞いてみるしかないと思い、

「カアさん、廊下にウンコが落ちていたよ」

といいながら居間にもどってくると、座椅子でうとうとしていた家内が、

「へえ、誰だろう」

といって、ケロッとしている。

「ここには、わたしとカアさんしかいないんだから、カアさんに違いない」というと、

「あれっ、わたしかしら」

と答えてから

「さっき、ウンコが出たくなったから、急いでトイレに行ったんだけど、その時途中でもらしたかなあ、気がつかなかった」

と、人ごとのように言って、平然としている。

その様子をみて、わたくしは杞憂が現実になったと直感して、呆然としてしまった。

この日のメモには簡単に「ミツ、大便をもらす」と書いてあるだけであるが、この日を境にして、家内の人生は思いがけない方向に変わって行ったのである。しかし、この時点では、それは夢想だにしない方向であった。

この時、わたくしは七三才、家内は六六才であった。家内は数年来肝臓を悪くし、三年前には半年も入院していたのであるが、ようやく退院することができて、その後は半病人のようになっていた。ところが、この春以来再び悪化し、一ト月ほど沢内病院に入院していた。幸い、経過がよく、退院してからは家でぶらぶらしていた。ところが、日がたつにつれて、また食欲が減退し、体調が思わしくなくなった。そして、体力がおとろえると同時に無気力になっていった。

しかし、涼しい秋になれば体調が回復してくるに違いないと、そうした希望のもとに毎日

を過ごしてきた。ところが、一向にその兆候が見えず、逆に病状が悪化してゆくような感じであった。

わたくしども夫婦は例年通り一〇月末には沢内村から盛岡市に移り住むことにしていたが、一〇月の半ばに入ると、家内の無気力が一段と昂じてきて、炊事のことなど投げやりになってきた。そのため、わたくしがかわりに炊事をするが多くなったが、このままではいけないと思つて、

「カアさんの味噌汁はともうまいから、味噌汁だけは作つてよ」
とおだてて、どうやら味噌汁だけはがんばって作つていてくれた。

ある日、わたくしがスーパーからキュウリを買つて来て

「カアさん、キュウリモミが食べたいから作つて」

とたのんだところ、珍しく機嫌よくキュウリを切り始めた。キュウリモミというのはキュウリの酢のもののことで、できるだけキュウリを薄くトン・トン・トンと切るのがコツである。じつは、わたくしは大変これが好きで、家内が病気になる前はよく酒の肴に作つてもらったものである。ところが、この時できあがったものを見ると、キュウリの厚さが数ミリもあつて、とても酢のものといえる代物ではなかった。

「おや、どうして、こう厚く切ったの」

と聞いたところ、

「包丁がよく切れない」

という。それではということで、砥石で包丁をといでやったが、結果は同じであった。結局、手が繊細に動いてくれないことが分かった。一体、どうしてそのようになったか、わたくしには思いあたることはなかったが、ただ感じたことは、「これはただごとではない」という心配であった。

それから二、三日すると、ズボンをはこうとしても手を上にあげることが容易でなくなつた。手に力が入らないという。その上、いつの間にか歩くのもヨチヨチ歩きになり、足がおぼつかなくなってきた。そのため、買い物に出るのをしづり、結局、わたくしが手を引いて、近くにある川徳デパートの食品売場に行くことが多くなった。最初のうちは、家内の手を引いて歩くことがとても恥ずかしかったが、そういう見栄や外聞を気にしては駄目だと自分に言い聞かせながら、がまんをしていた。しかし、馴れるに従って、そのことがあまり気にならなくなった。

家内の病気は数年来、内科医の弟がみていてくれ、その指示に従っていた。それによると、

ウツ状態からアルコール嗜好症となり、アルコール性肝障害をおこしているということで、ずうっと薬を服用していた。

ミツはいつの間にか玄関の錠のカギ穴に鍵を入れて開閉することができなくなってしまった。いろいろためしてみたが、どうしてもうまくいかなかった。それで、もうあきらめかけたが、どうも、手に力を入れ過ぎているようなので、二人で指の間にチリ紙をはさんで引き合った。

「これ位の力なら、うまくゆくよ」

と、力加減を教えてから、ためしてみたところ、やっと鍵の使用ができるようになった。つまり、自由に鍵のさし込みができなかったのは、力を入れ過ぎていたためであった。

そういうことが重なり、なんとなく暗澹とした気持になってきたが、これではいけないと、わたくしはつとめて明るくふるまい、ミツができなくなった分をわたくしが補えばよいという風にきりかえていった。

寝室はせまい六畳間で、廊下をへだててすぐトイレであるから、距離にして僅か三メートル位である。ところが、家内は寝ている時小用を催しても、行動がもたもたして、結局トイレにしゃがむ前にもらしてしまうことが多くなった。毎晩のように、一回か二回失敗したが、

わたくしは下手なことを言うよりもだまっていた方がよいと思って、口から出かかるのをおさえていた。

ところが、ミツはそのことが気になるとみえて、毎朝わたくしよりも早く起きて、最初に洗濯をした。洗濯といっても、自動洗濯機なので、その中に洗濯物を放りこみ、洗い、すすぎ、しぼりの三つのぼたんを次々に押して、最後に自動乾燥機に入れて、四十分ほど放置すればそれで出来あがりであるから、きわめて簡単である。わたくしはミツのその様子をそれとなく注意していたが、洗濯だけはごくあたりまえに行い、わたくしの物も一緒に洗濯をしていた。

あれほど、炊事がきらいになったのに、なぜ洗濯だけきちっと行うのか、そのことが気になったので、ある時そのことを聞いてみたところ、

「だって、洗濯ぐらい、わたくしがしなければ、することがなくなるんだもの」

という返事が返ってきた。

いくら、無気力になったとはいえ、心のなかには主婦の座が占めていて、それがこのようなかたちで現われているのだと思うと、不憫でならなかった。

しかし、同情していただけでは、かえってマイナスになると思い、わたくしはできるだけ

主婦の仕事である炊事や掃除などをするように仕向けていった。

この場合、わたくしが一番氣をつかったことは命令ではなく、おだてることであつた。まるで五才位の子供と同じように、おだてると割合そのことを実行し、けっこう主婦としての役目をはたしてくれた。

しかし、これから先どういうことになるだろうかと思うと、行く末が案じられて、わたくしは思わず溜息をもらすことが多くなつた。

たまたま、こういう矢さきに家内の妹たち二人が訪ねて来て、ミツの異常に氣付いたらしく、ミツがトイレに立ったあと、

「姉さん、少しおかしいじゃない、ボケたみたい」

という。そこで、わたくしは春以来の病状の経過を話し、とくに、ウンコの件を詳しく説明した。すると、妹は、

「まだ、ボケなくともいい年なのにねえ、一体、どうしたんだらう」

と言いながら、わたくしの返事を待っている風であつた。しかし、そこへミツが、
「また、オシッコをもらしちゃつた」

と言いながら帰つて来たので、ボケの話はそれきりになつてしまつた。

